わたしも博物館人

中世人になってお待ちしています。

近江の国　中世なんでも探検隊　前田　雅子

琵琶湖博物館の「近江の国　中世なんでも探検隊」に参加して1年になります。遺跡や史料、絵巻物から見える中世庶民の暮らしを体験するこの活動は、私にとってドキドキワクワクの連続でした。

麻の茎を細かく裂いて、糸を作ることから始まった機織りでは、こんなに労力を費やしていたのかと、中世の生活の大変さを感じたものです。それが勧請縄やヨシ葺き屋根をつくる中で、縄の結び方ひとつにも技と工夫があることを知り、「恐れ入りました」と脱帽。生活技術に敬意をいだくようになりました。

すり鉢を作っていた時です。粘土紐を一段一段積み上げるだけでも苦労していたのですが、粘土がイメージしていたとおりに動くと感じる瞬間がありました。無心に粘土を積み上げる心地よさと、土との一体感で、私は初めて作品に対する愛着を感じたのです。

私の仕事（クラシック音楽）ではなまの音を重視します。ですから演奏は1回きりの勝負であって、「もの」を作品と考える感覚はありません。でも、このすり鉢は私の作品です。客観的に見ればつまらない作品かもしれませんが、製作をとおして、中世にまた一歩近づいたような気がするからです。

私たち「中世なんでも探検隊」が夏から秋の企画展示室でお待ちしております。皆さんも、中世の近江をぜひ覗きにいらしてください。

（中世なんでも探検隊については2～3ページを参照）

どこでも博物館

古琵琶湖の動物たちをタイにもとめて

専門学芸員（古脊椎動物学）
高橋　啓一

4月末から5月はじめの連休に足跡化石を研究している岡村喜明さん（草津市在住）とタイに調査に行きました。古琵琶湖層（約400万年～40万年前）やそれと同じ時代の日本からでている化石の中には、現在の東南アジアにすんでいるものも多く、これら 現在の動物を勉強することが、化石の謎を解く鍵となるからです。

タイでは、動物園や研究所などにある標本を調査し大きな成果が得ることができましたが、それにも増して、自然公園の中でヤマイヌに襲われたシカの死骸に出くわしたことは収穫でした。死骸を覆うように這い回るウジやハエといっしょになって、こちらも足型やら歯型をとってきました。

近くには、以前に襲われたシカの骨がざっと見ただけでも数頭分あり、その散乱状態や噛み砕かれた骨の様子は、化石になる経過を考える上で大変勉強になりました。

←死骸の状態を記録におさめる。近くにはヤマイヌ（*Cuon alpinus*）の足跡が無数にあるので犯人はすぐわかる。（タイ，カオヤイ国立公園）

利用者から

A展示室は、琵琶湖のおいたちを紹介する部屋です。人間がまだあらわれる前の琵琶湖のまわりの姿を展示しています。今日は展示交流員のみなさんに利用者の声についてお話をうかがいました。

▶A展示室では利用者の方からどんな質問がでますか？

▶「どこで化石がでるのか」という質問が多いですね。

▶どのように答えているのですか？

▶「野洲川にいったらいつでもとれますよ」というと驚かれていました。じつは先日、10人ぐらいの展示交流員で集まって、化石をとりにいったんです。貝がたくさんとれました。

▶現場で確かめることもあるんですね。でも古すぎて説明しにくいことはありませんか。

▶たしかに50万年とか400万年といっても，ピンとこないことが多いです。そこで、お金になおして説明すると、時代の長さをよくわかってもらえることがあります。50万円とか、400万円とかね。

▶なるほど、お金に直すんですか。考えますね。展示室ではどんな展示に人気がありますか？

▶やはり化石のところですね。たとえばコウガゾウです。いきなり大きなゾウがあるから目立つのでしょうね。中国のゾウがなぜ日本にいたのかよく尋ねられます。

コウガゾウ

アンモナイトの化石

▶「鉄腕ダッシュ村」（テレビ番組）の影響はありますか？

▶最近は、口にされる方もいますね、恐竜のウンチなんかは人気があります。「何でわかんの？」とか。

▶子どもたちはどうですか？

▶ゾウは子どもたちにも人気がありますが、アンモナイトを見せてくださいという子どもさんがたくさん来られます。

▶ほかには？

▶私は個人的には「研究室」展示のイノシシの骨をつかって話をするのが好きです。

▶骨ですか？

▶そうです。「どこの骨やと思う？」と聞くと、けっこう子どもたちは、熱中して取り組んでくれます。立ちどまって、聞いてくれるとこちらもつい熱が入ります。

イノシシの顎の骨